

保育の見直し ― その三

変化する子どもたちの成長を支える

市川由利絵

一九九〇年代に入り、職員の中で「子どもが年々幼くなってる気がする」そんな話題がよくあがるようになりました。手が洗えない、ブランコにのれない、階段をおりられない、お弁当も口に運んでもらわないと食べられないなど、時代の変化は親の過保護過干渉を招き、子ども達の成長に様々な後退的な変化をもたらしました。また、この年から三歳児の入園が増加したと共にその傾向に拍車がかかりました。そんな子ども

達をまのあたりにし、私達保育者は驚きと戸惑いの連続でした。次第に保育の中でやるべきことが増え、身体的にも精神的にも大きな負担がのしかかってきました。しかし、みんなで話し合いを重ねていくうち、こんな時代だからこそ、子ども達をしっかりと支えていくべきではないのか？ 今の子ども達にあった保育を考へるべきではないのか？ そんな気持ちが始まらずに、くらしはじめてのです。こうして今までの保育のあり

方をふりかえる機会がふえ、新たに保育の改善を行うことになったのです。

変わりゆく時代を生きる子どもを支える

—一九九〇年代—

幼稚園に通う子ども達の様子やそれを取りかこむ時代の流れや社会状況をふまえながら、保育の中で大きく改善していったこと

○環境問題を意識する。

- ・ 子どもの廃物製作は、発泡スチロールの素材はつかわない
- ・ ゴミを、燃やしていいものと燃やさないものに分別
- ・ プラスチック製品の遊具をなるべくさけ、木の遊具を使用

・ 子どもが使うタオルなどの洗濯の時に合成洗剤は使わず、石けんを使用

○アトピー体質の子どもに対応する

- ・ 三歳児のおやつを無添加食品にする

・ その子の詳細な情報を職員全体で把握

○体験不足の子どもに対応する

- ・ 遊び方、生活習慣をよりていねいに指導

○一人一人にあった保育を考える（人とかかわりが持てない、喜怒哀楽を表情に出せない、空想の世界で遊べない、砂や絵の具で遊べない、他の子が近づくとけでぶつ、数字や記号にばかり興味を持つ、など様々な子どもの成長に対応するために）

- ・ 保育の補佐に子育て経験のある人をつける
- ・ 造形表現、心理療育など、専門家のサポートを厚くし子どもの捉え方の幅を広げる
- ・ 日常の保育の中の悩み、疑問を研修にとりあげ子ども理解を深める

行事の見直し再び

一九七〇年代に伝統的な行事保育を子ども主体の保

育に切り替えて、二十年がたちました。子ども主体の保育は定着し、安定期を迎えましたが、常に新鮮なまなざしで行事などの内容を見直し、洗練させていかなと、マンネリ化を招いてしまいます。そうした地道な取り組みを続けることも今、私達の園にとっては大切な課題です。

○わくわく展への新たなアプローチ

わくわく展は子ども達の生活や成長を写真や作品を通して伝える毎年恒例の行事です。平成八年（一九九六年）秋頃、当時年長組を担当していた二人の保育者がそのわくわく展をひかえ、こんな話をしていました。

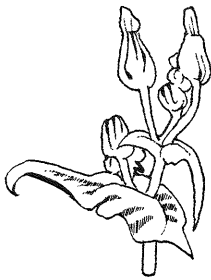
「二学期になって子ども同士のつながりがすごく深まってきたよね。子ども達の遊びを見ると、チームワークのよさが見えたり、けんかをしながらお互いに納得できるように自分で解決していたり、相手をみとめながら自分を生かせるようになったり……、わ

くわく展で年長組のこういう姿を見せたいね。でも、今までみたいに当日までの子ども達の園での様子を写真展示するだけだと今の子ども達の成長の様子は伝えにくいよね。何かいいやり方はないのかな？」来る日も来る日も二人でその話をしていましたがなかなかこれだ！ という案がでてこないようでした。

そんな時、職員の中から、「当日、子ども達の遊びをそのまま見せたらどうかしら？ そこからみんなに成長を感じてもらおうよ！」そんな声があがったのです。新しい発想を取り入れてみたいと思いつつもその反面では親達の反応はどうなのだろうか？ 子ども達はいつもの姿をみせてくれるのだろうか？ そんな心配もあり答をだすま

では何度も話し合いが必要となりました。

話し合いを重ねるうちに、年長の担任を中心に職員みんなの気持





ちも次第に団結していき、こうしてわくわく展は子ども達の遊びをそのまま見せるやり方に決まりました。新しい試みから四年。今では年長組のわくわく展は別名パフォーマンス・アートともいわれるようになり、

みんなこの日がくるのを心待ちにしています。では、その一部をご紹介します。わくわく展当日、子ども達はたくさんの方が集まる中で生き生きと自分の担当の活動に取り組んでいます。

た（写真参照）。また、お母様方からも「動く展覧会のように子どもの様子がよく見えた」「子ども同士で遊びを作りあげているのがわかり成長を感じた」など様々な感想をいただくことができました。今まで保育の中で私達は子どもの遊びが見栄えよくなるように、形が残るようについついルールをひいてしまっていたように思います。わくわく展を通して、そんな自分

おすし屋さん

カウンターにはまめしほりをギュッとしめた子どもたち。まるでちびっこ職人のおもちです。「おまえ、にあうじゃん！ 本当のおすし屋さんみたい」「エへ」と照れ笑い。そんな中、1人また1人とカウンターの席はお客さんでうまっていく。お客さんに何と声をかけてよいものか…。

「何がおいしいの？ そうね、アナゴもらおうかな」との注文の聲がかかる。「はい！！」と元氣よく返事をすると、ねんどのご飯をひとつまみ手の平にのせ、あざやかな手つきでご飯の上にアナゴをのせる。「はい、おまち！！」と、カウンターにさしだす。お母さんたちもそれを見て、にっこり微笑む。

今度は子どもたちから、「次は何にしますか？」と、声がかかる。「トロのわさび抜き」「私もください」「ウニありますか？」みんなで一生懸命につくったネタがカウンターの晴れ舞台をかざる。

「あがりおねがい」「あがりってなんだっけ」板さん同志でヒソヒソ話…。大繁盛のおすし屋さんには長い行列ができました。

※ここで取り上げたのは

年長組（五歳）の取りくみの一例です。わくわく展のやり方は学年によって、またその年の子どもの様子によっても変わります。

○その他

大きく改善した園行事

・ 入園式 全園児を集め

形式的に行っていた

やり方をやめ、クラ

達の保育、遊びの援助の偏りをふりかえることができませんでした。

子ども達は日々何気なく繰り返る遊びの中で少し

ずつ成長していきます。これからもそのことを大切にふまえ、より子ども達の生活に近づいた所で園行事を考えていこうと思っっています。

別に設ける

園外保育 子どもの活動の場を広げ、地域社会での保育（例、近隣の公園、図書館、美術館など）を増やす。そこでの直接体験を大切にす

る。

・誕生会 子どもの発達の差を考えて、四・五歳児と三歳児をわけて行うようにする。

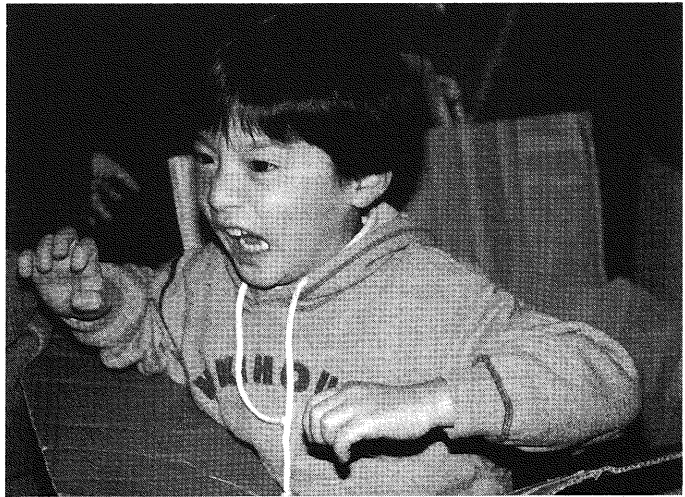
・ファミリーデー 父と子の触れ合いを願い九〇年代に新しく始めた行事。父親を園に招き子どもと一緒に遊ぶ時間を作る。また父親のための講演会や父親同士のディスカッションの時間も設ける。

・運動会 チームごとの聖火入場、形式的な開閉式などみせるためのプログラムを改善し、親も子ども十分に力を発揮し、楽しめるものに内容を変更する。

など

これから——今私達ができること——

三回（五月・七月・九月号）にわたり、『保育の見直し』をテーマとし、私達の幼稚園とその周辺のことをふりかえってきました。この二十年、時代の流れや



▲おばけやしき

子ども達の成長の著しい変化の中、私達の保育は「これでいいのだろうか？」と日々試行錯誤の連続でした。園の教育目標の一つである「どんなことに出会っ



てもしつかりと生きていけるように”というねらいは、もしかすると子どもだけでなく私達保育者にも言えることなのかもしれません。

これからも悩んだりつまずいたりしながら、私達の保育の探索は続いていくことと思います。二十一世紀はもうすぐそこです。まだよく先が見えず、子ども達の将来のことを思うと不安は募ります。しかし、目の前にいる子ども達のためにも私達は、自分の心と体の健康を心がけ、前向きな気持ちで保育をしていかななくてはと思っています。

(横浜学園付属元町幼稚園)

参考文献 『保育ライプシリーズ3 わくわく展(五才児)』

横浜学園付属元町幼稚園